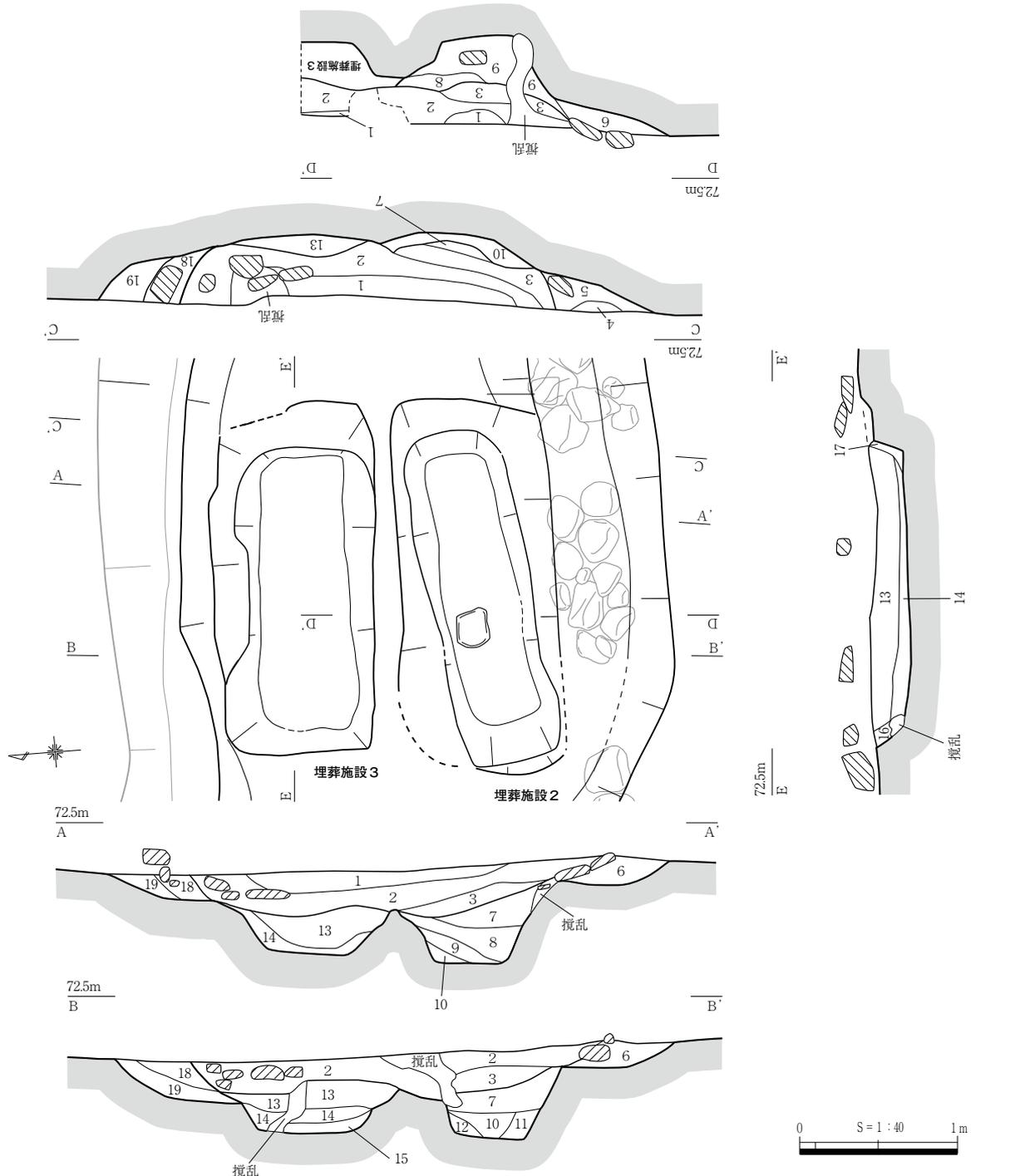


1. 黒褐色 (10YR3/2) φ 1cm以下のⅦ層由来の砂粒混。
 2. 黒色 (10YR2/1) φ 1cm以下のⅦ層由来の砂粒混。
 3. 黒褐色 (10YR3/2) φ 1cm以下のⅦ層由来の砂粒混。φ 1cm以下のⅤ層ブロック微混。
 4. 灰黄褐色 (10YR4/2) 粘性やや弱。φ 1cm以下のⅦ層由来の砂粒混。φ 1cm以下のⅤ層ブロック多混。
 5. 灰黄褐色 (10YR4/2) 粘性やや弱。φ 1cm以下のⅦ層由来の砂粒混。φ 1cm以下のⅤ層ブロック少混。
 6. 灰黄褐色 (10YR4/2) φ 1cm以下のⅦ層由来の砂粒混。
 7. 灰黄褐色 (10YR4/2) φ 1～2cmの黒褐色土 (10YR3/2) ブロック多混。φ 1～3cmのⅤ層ブロック少混。
 8. におい黄褐色 (10YR4/3) φ 1～2cmの黒褐色土 (10YR3/2) ブロック多混。φ 1～3cmのⅤ層ブロック多混。
 9. 黒色 (10YR2/1) φ 1cm以下のⅤ層ブロック少混。
 10. 黒褐色 (10YR3/2) Ⅲ層 (クロボク)～Ⅳ層に該当。
 11. 黒褐色 (10YR3/1) φ 1cm以下のⅦ層由来の砂粒多混。φ 1cm以下のⅤ層ブロック少混。
 12. 黒褐色 (10YR3/2) φ 1cm以下のⅦ層由来の砂粒混。φ 1cm以下のⅤ層ブロック少混。
 13. 黒褐色 (10YR3/2) φ 1cm以下のⅦ層由来の砂粒混。φ 1cm以下のⅤ層ブロック少混。
- 4号墓区画溝
- 4号墓突出部 (北西隅)
- 埋葬施設3

第44図 3号墓南辺・4号墓北辺区画溝礫検出状況



1. 黒色 (10YR2/1) φ 1 cm以下のV層粒少混。φ 1 cm以下のVII層由来の砂粒混。
 2. 灰黄褐色 (10YR4/2) φ 1 cm以下のV層粒多混。φ 1 cm以下のVII層由来の砂粒混。φ 1～5 cmのVII層由来の未風化の火山砂少混。
 3. 黒褐色 (10YR3/2) φ 1 cm以下のV層ブロック少混。φ 1 cm以下のVII層由来の砂粒混。φ 1～5 cmのVII層由来の未風化の火山砂少混。
 4. 黒褐色 (10YR3/1) 粘性やや弱。しまりやや弱。
 5. にぶい黄褐色 (10YR4/3) φ 1 cm以下のV層ブロック微混。φ 1 cm以下のVII層由来の砂粒少混。
 6. 灰黄褐色 (10YR4/2) φ 1～3 cmのV層ブロック微混。φ 1 cm以下のVII層由来の砂粒少混。
 7. 灰黄褐色 (10YR4/2) しまりやや弱。φ 1～3 cmのV層ブロック多混。φ 1 cm以下のVII層由来の砂粒少混。
φ 1～5 cmのVII層由来の未風化の火山砂多混。
 8. 灰黄褐色 (10YR4/2) φ 1～3 cmのV層ブロック極多混。φ 1 cm以下のVII層由来の砂粒混。φ 1～5 cmのVII層由来の未風化の火山砂混。
 9. 灰黄褐色 (10YR4/2) φ 1～3 cmのV層ブロック多混。φ 1 cm以下のVII層由来の砂粒混。φ 1～5 cmのVII層由来の未風化の火山砂混。
 10. 褐灰色 (10YR4/1) φ 1～3 cmのV層ブロック少混。φ 1 cm以下のVII層由来の砂粒混。
 11. にぶい黄色 (2.5Y6/4) 粘性やや弱。しまりやや弱。φ 1～3 cmのV層ブロック多混。
 12. 黄褐色 (2.5Y5/4) 粘性やや弱。しまりやや弱。φ 1～3 cmのV層ブロック多混。
 13. 黒褐色 (10YR3/1) φ 1～3 cmのV層ブロック多混。φ 1 cm以下のVII層由来の砂粒混。φ 1～5 cmのVII層由来の未風化の火山砂少混。
 14. 灰黄褐色 (10YR4/2) φ 1～3 cmのV層ブロック少混。φ 1 cm以下のVII層由来の砂粒混。
 15. にぶい黄褐色 (10YR5/3) φ 1～3 cmのV層ブロック多混。φ 1 cm以下のVII層由来の砂粒少混。
 16. にぶい黄褐色 (10YR4/3) 粘性やや弱。しまりやや弱。φ 1～3 cmのV層ブロック多混。
 17. 黒褐色土 (10YR3/2) 粘性やや弱。しまりやや弱。φ 1～3 cmのV層ブロック微混。φ 1 cm以下のVII層由来の砂粒少混。
 18. 灰黄褐色 (10YR4/2) φ 1～3 cmのV層ブロック微混。φ 1 cm以下のVII層由来の砂粒少混。
 19. 暗褐色 (10YR3/3) φ 1～3 cmのV層ブロック微混。φ 1 cm以下のVII層由来の砂粒少混。
- 4号墓区画溝
 - 4号墓貼石裏込
 - 埋葬施設2
 - 埋葬施設3
 - 3号墓区画溝 / 貼石裏込

第45図 4号墓 埋葬施設2・3

現状の区画溝の深さは10cm程度に過ぎず、墓壙の遺存状況と併せて考えると、墳裾から掘り込まれた可能性が高い。検出した墓壙の規模は、長軸1.10m、短軸0.60m、深さは0.27mである。

墓壙内は、樹木根による攪乱の影響により、しまりの弱い堆積から成り、木棺の痕跡は窺えなかった。ただ、墓壙両小口に河原石が据えられ、本遺跡における他事例から、これらは棺材支持のために裏込めに供されたものと判断でき、本埋葬施設は木棺墓と考える。

東側小口には、長軸0.30m、短軸0.22mを測る板状の河原石が一石確認できる。ただ、攪乱により若干移動したとみられ、墓壙底面より浮く。本来は棺材に接して据えられていたと考えられる。一方の西側小口は、長軸0.15～0.2m弱と小振りな石を用い、棺材と墓壙掘方間に詰めるような状況が窺える。これら石の配置から木棺の長軸を復元すると、0.6～0.7m程度となる。本埋葬施設の規模は小型の箱式石棺を擁する2号墓の埋葬施設4と近似し、未成人埋葬に伴うものと考えられる。

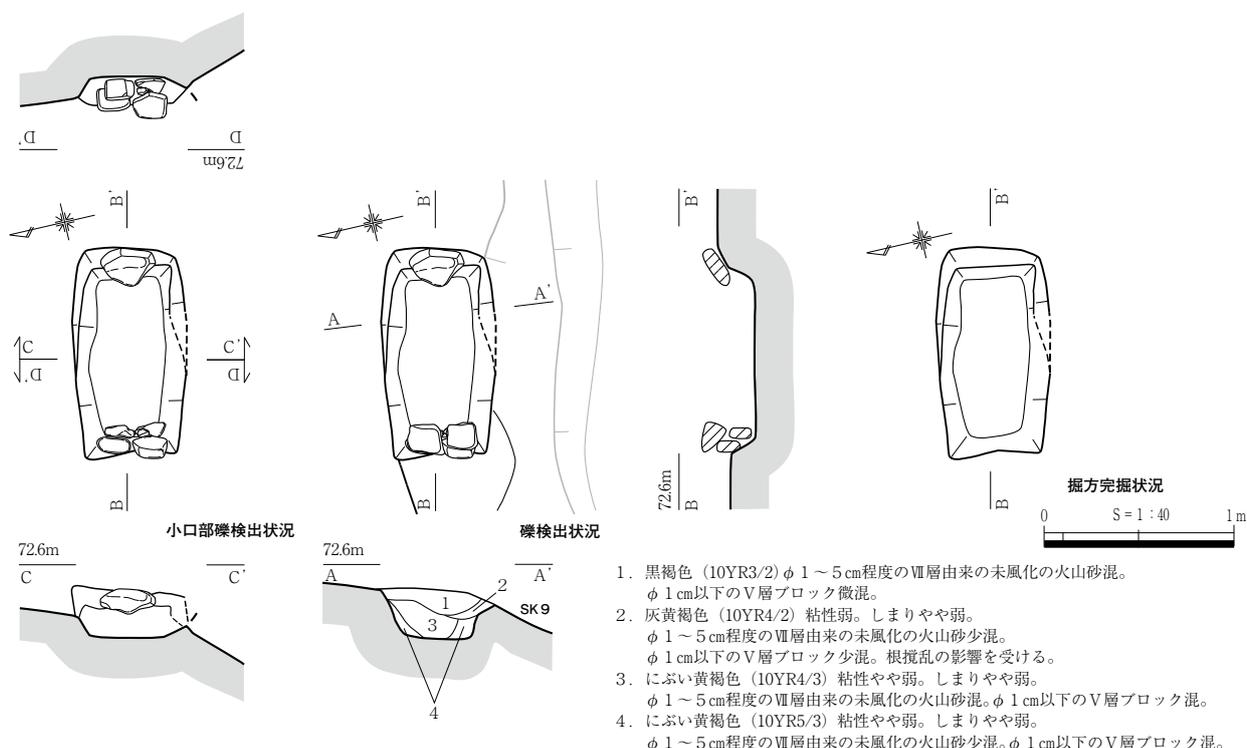
残存する墓壙掘方の平面形や底面レベルからは埋葬頭位を判断する材料に欠け、西頭位、東頭位のいずれを採るかは判然としない。

(5) 出土遺物(第47・48図、PL.55・66～68)

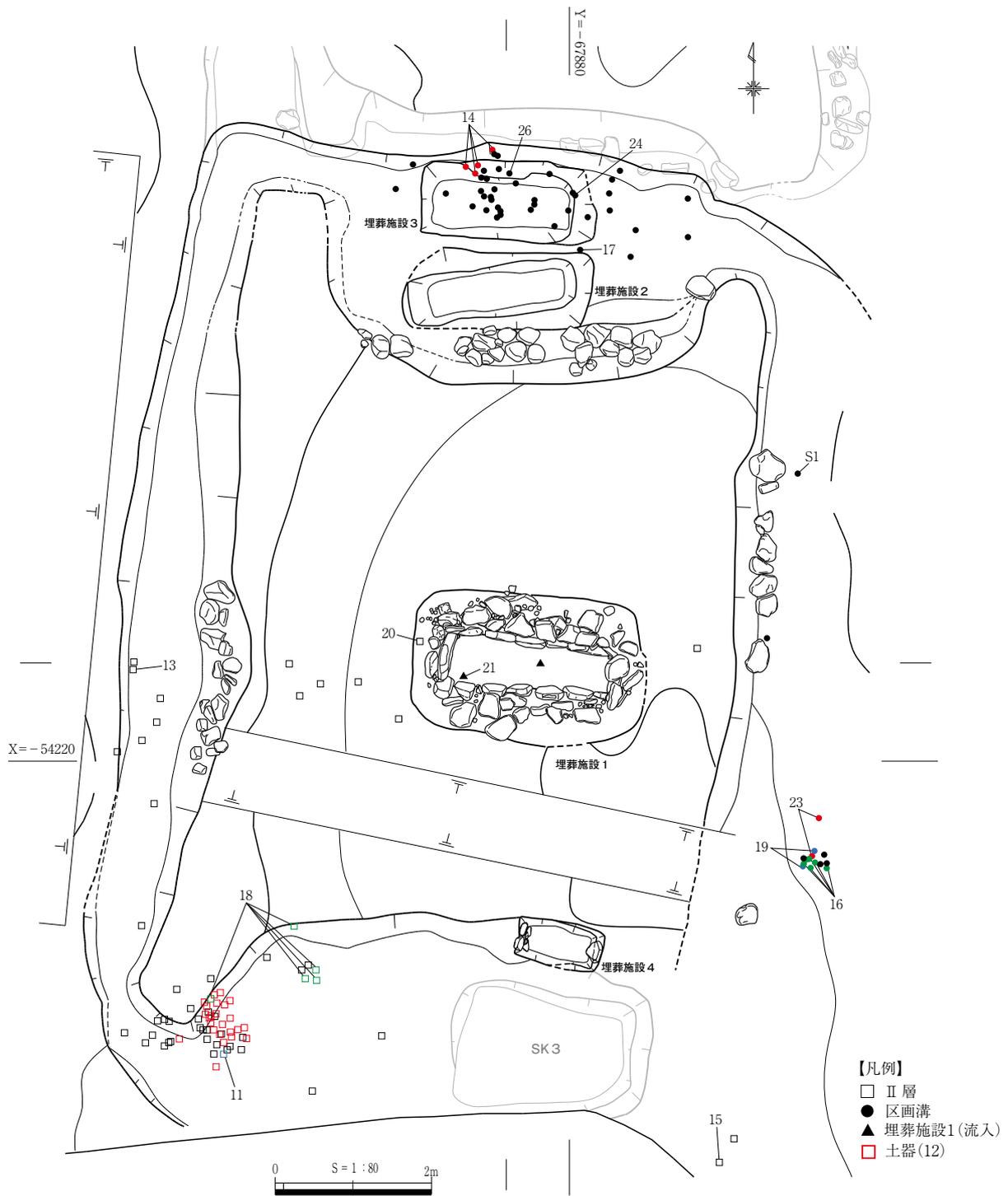
1～3号墓と同様、表土(I層)、遺物包含層(II層)、区画溝、埋葬施設1から土器、石器が出土したが、原位置を保つものは無い。区画溝埋土中で出土した土器は、多くが転落石に伴うことから、墳丘上から転落した可能性が高い。出土遺物の分布をみると、大きく4つのまとまりが確認される。

- ① 区画溝北辺。3号墓区画溝の南辺と重複する箇所。
- ② 区画溝東辺のやや南寄り。土器が数個体、転落石の下敷きになり出土している。
- ③ 区画溝南西隅付近。土器数個体が細かく割れた状態で出土した。
- ④ 区画溝西辺。細片が多くII層からの出土であり、墳丘上から流出した状況が窺える一群である。

①は、3号墓由来の遺物を含む可能性がある。埋葬施設2・3の項で述べたとおり、3号墓からの転落が想定される礫群があり、それらに伴う遺物を含むことは十分に考えられるが、出土位置を重視



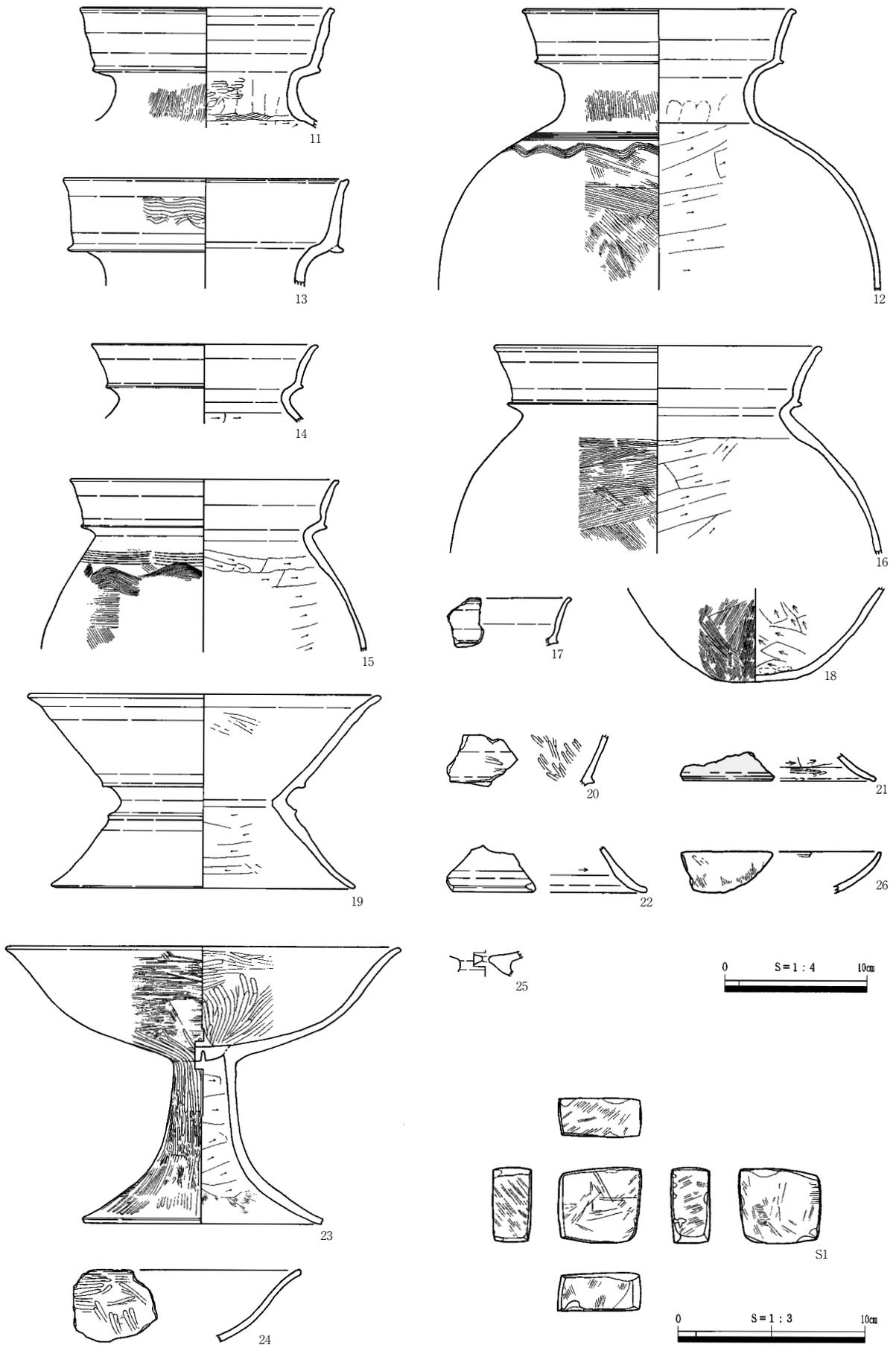
第46図 4号墓 埋葬施設4



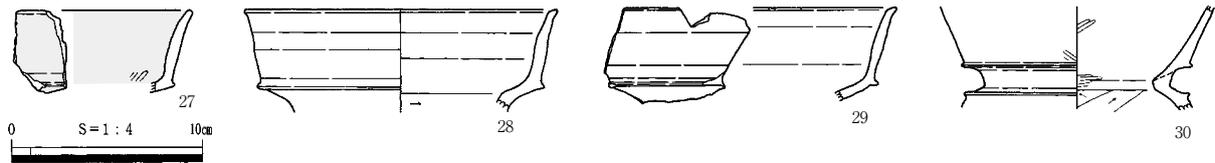
第47図 4号墓出土遺物分布図

し、本項に記載する。検出した土器は細片・小片が目立ち、良好に復元できる資料は無い。②・③は出土位置、出土状況により墳丘上から区画溝への転落が明瞭である。各資料の復元率も比較的高い。③はいずれもⅡ層中での出土だが、墳丘・区画溝の遺存状況の悪さを勘案すると土壌化の進行によるものと想定でき、4号墓に伴う蓋然性は高い。④はⅡ層中で出土した小片、細片資料であるが、墳丘上から区画溝側への土壌化、流出の過程が窺える。また、埋葬施設1の棺内において土器片が数点認められたが、いずれも棺流入土中からの出土で、二次的な移動に伴う資料である。

第48図11～26は土師器である。11～13は壺で、いずれも外反気味に立ち上がる複合口縁を呈する。



第48図 4号墓出土遺物



第49図 I・II層出土土師器

11・12は出土地点③における資料である。11の口唇部は平坦面を持ちつつやや凹み、口縁下端部は横に短く突出する。12は丸みを帯びる胴部上半まで復元された。口唇部は外側に折れ、平坦面を有する。口縁下端部の突出は小さいがシャープである。13は地点④出土。大型品と思われ、器壁はやや厚手である。口縁部に波状文が施され、平坦な口唇部に沈線状の凹みが認められる。口縁下端部は、横方向に大きく突出するがややシャープさを欠き、粘土を貼り付け整形している。

14～16は甕で、外反する複合口縁を呈する。口唇部は外側へ少し折れ、若干の平坦面を有する。口縁下端部は短く横に突出する。15・16は肩部から胴部にかけて復元されたが、なで肩で球胴形を呈するとみられる。17・18は壺又は甕である。17は外反する複合口縁を持ち、口唇部には平坦面を有する。18は底部資料で、薄手の器壁に細かいハケメを外面に施す。底部形態は丸みを持ち、レンズ状を呈する。地点③において、壺(11・12)と共に出土した。いずれかと同一個体をなす可能性が高い。

19～22は鼓型器台である。19は器形全体を窺える資料で、地点②出土である。受部と脚部間の距離が詰まり(2cm)、12cm弱に復元される太めの筒部を持つ。20は受部の小片で、内面の細かいミガキが残る。21・22は脚部片である。

23～25は高坏である。23は出土地点②で検出した資料で、遺存状態は比較的良好で器形全体を復元することができた。坏部は緩やかに立ち上がり、口唇部付近で外反する。脚部は裾部において緩やかに開く。坏部内外面、脚部外面には単位の細かいヘラミガキを施す。坏部と脚部の接合は円盤充填で、円盤にははっきりとした軸痕を有する。24は地点①出土の破片資料。口縁部は外反し、23と同様なタイプである。25は坏部と脚部の接合部で、不明瞭だが円盤充填による接合が想定される。坏部底面には小孔が認められる。軸痕が貫通した可能性を考えるが、由来は不明である。

26は丸みをもって立ち上がる口縁部資料で、低脚坏と考えられる。坏部は皿状を呈するとみられ、内外面にミガキを施す。

S1は砥石で、肌理が若干粗く荒砥に該当すると思われる。直方体を呈する全面に擦痕が残る。

以上、4号墓出土遺物について概観した。地点①出土資料のように帰属する遺構が曖昧な資料も含むが、土器の特徴は、天神川編年においてはI期の範疇に含まれると考える。

墳墓関連遺物(第49図、PL.67)

I・II層出土資料のうち、どの墳墓の帰属か不明確なものを掲載した。27は斜面部出土。28・29は2号墓もしくは3号墓に帰属する可能性の高いものである。いずれも口唇部が外方に折れ、平坦面を有する。30は3号墓又は4号墓帰属か。鼓形器台で、4号墓出土の19と同タイプである。いずれも天神川編年ではI期に相当し、古墳時代前期初頭に位置付けられる。

2 土坑

SK 1 (第50図、PL.69)

C2グリッド、標高72.0mに位置する。II層下のIII層より掘り込まれるのを確認したが、上位のほとんどを3号墓の区画溝に切られる。平成22年度確認調査におけるTr.4検出のSK1と同遺構である。

検出面における土坑の平面形は、長軸1.34m、短軸1.08mの不整な楕円形状を呈する。

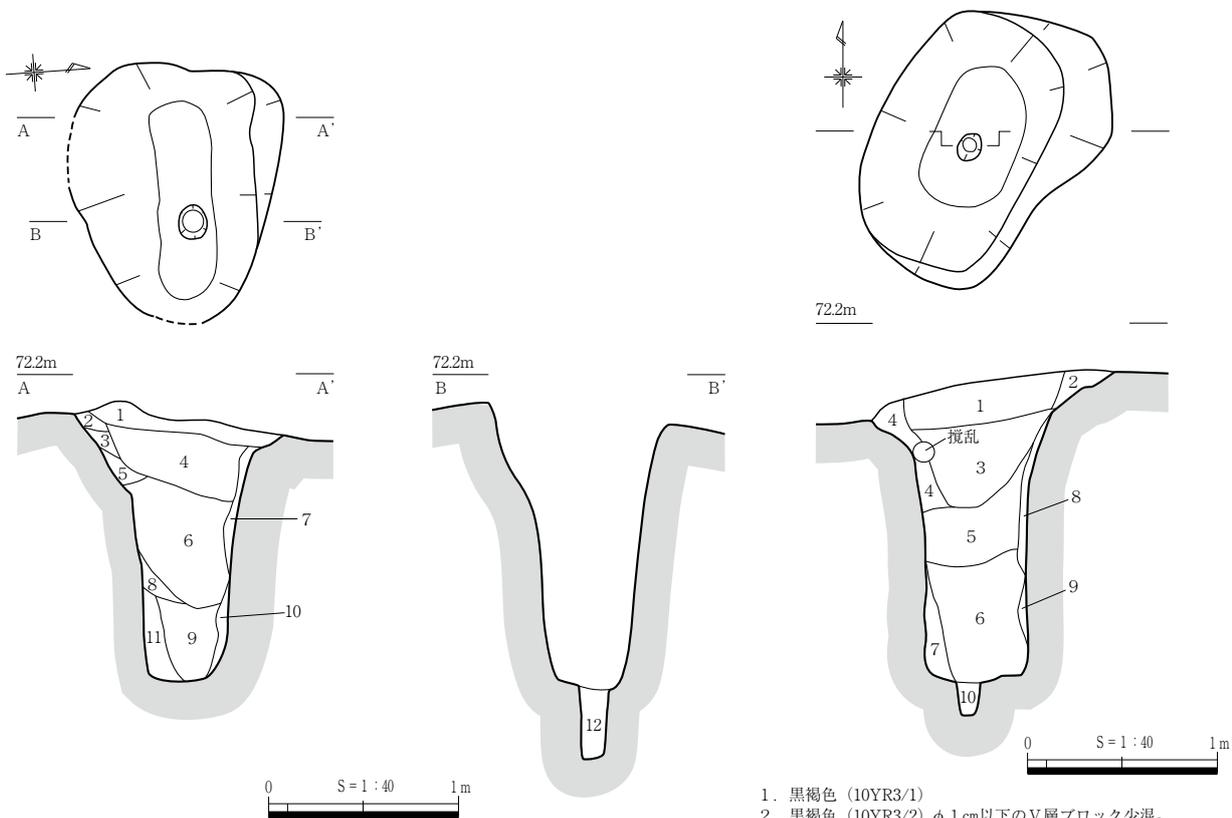
埋土色調は黒色、黒褐色を主体とし、自然堆積による埋没過程が窺える。

底面は幅0.3mと狭く、ほぼ中央でピットを1基検出した。ピットの平面形は概ね円形で、長軸0.18m、短軸0.15mを測る。土坑底面からの深さは0.38mである。埋土は黒褐色を呈し、しまりが弱い。

本遺構からの出土遺物は無いが、形態及び規模から縄文時代に帰属する落とし穴と考える。

SK 2 (第51図、PL.69)

E2グリッド、標高71.9mに位置する。II層下のIII層及びIV層で検出した。4号墓南西隅の突出部と重複し、掘方の一部を同区画溝により掘削されている。



1. 黒褐色 (10YR3/2) ϕ 1 cm以下のV層ブロック少混。
2. 灰黄褐色 (10YR4/2) ϕ 1 cm以下のV層ブロック混。
3. にぶい黄褐色 (10YR4/3) ϕ 1 cm以下のV層ブロック混。
4. 黒褐色 (10YR3/1) ϕ 1 cm以下のVII層由来の砂粒混。 ϕ 1 cm以下のV層ブロック少混。
5. 黒褐色 (10YR3/2) しまりやや弱。 ϕ 1 cm以下のV層ブロック混。
6. 黒色 (10YR2/1) ϕ 1 cm以下のVII層由来の砂粒多混。 ϕ 1 cm以下のV層ブロック微混。
7. 暗褐色 (10YR3/3) 粘性やや弱。 ϕ 1 cm以下のV層ブロック少混。
8. 灰黄褐色 (10YR4/2) 粘性やや弱。しまりやや弱。 ϕ 1 cm以下のV層ブロック少混。
9. 暗褐色 (10YR3/3) 粘性やや弱。 ϕ 1 cm以下、 ϕ 1~2 cmのV層ブロック少混。
10. 褐灰色 (10YR4/1) 粘性やや弱。しまりやや弱。 ϕ 1 cm以下のV層ブロック多混。
11. にぶい黄褐色 (10YR4/3) 粘性やや弱。しまりやや弱。 ϕ 1 cm以下のV層ブロック混。
12. 黒褐色 (10YR3/2) 粘性やや弱。しまり弱。 ϕ 1 cm以下のV層ブロック多混。底面ピット埋土

第50図 SK 1

1. 黒褐色 (10YR3/1)
2. 黒褐色 (10YR3/2) ϕ 1 cm以下のV層ブロック少混。
3. 黒色 (10YR2/1) ϕ 1~5 cmのVII層由来の未風化の火山砂少混。 ϕ 1 cm以下のV層ブロック少混。
4. 灰黄褐色 (10YR4/3) 粘性やや弱。しまりやや弱。 ϕ 1 cm以下のV層ブロック多混。
5. 黒褐色 (10YR3/1) ϕ 1~5 cmのVII層由来の未風化の火山砂少混。 ϕ 1 cm以下のV層ブロック少混。
6. 黒色 (10YR3/1) ϕ 1~5 cmのVII層由来の未風化の火山砂少混。 ϕ 1 cm以下のV層ブロック少混。
7. 黒褐色 (10YR3/2) 粘性やや弱。しまりやや弱。 ϕ 1 cm以下のV層ブロック多混。
8. 黒褐色 (10YR3/2) 粘性やや弱。 ϕ 1~5 cmのVII層由来の未風化の火山砂少混。 ϕ 1 cm以下のV層ブロック混。
9. 灰黄褐色 (10YR4/2) 粘性やや弱。しまりやや弱。 ϕ 1~5 cmのVII層由来の未風化の火山砂少混。 ϕ 1 cm以下のV層ブロック多混。
10. 黒褐色 (10YR3/1) 粘性やや弱。しまり弱。 ϕ 1 cm以下のV層ブロック多混。底面ピット埋土

第51図 SK 2

平面形は長軸1.53m、短軸1.10mの楕円形で、検出面からの深さは1.64mである。

埋土は黒褐色、黒色を主体とし、自然堆積による埋没と推測する。

土坑底面ほぼ中央でピット1基を検出した。ピットの平面形は長軸0.17m、短軸0.12mと概ね円形を呈し、土坑底面からの深さは0.18mである。埋土は単層で、黒褐色を呈する。

本遺構から遺物は出土していないが、形態及び規模から縄文時代に帰属する落とし穴と考える。

なお、底面ピット埋土中より炭化物が抽出でき、それを試料として放射性炭素年代測定を実施したところ、補正年代値で3378±26BP (IAAA-112687)、縄文時代後期中葉という測定結果を得た。

SK 3 (第52図、PL.70)

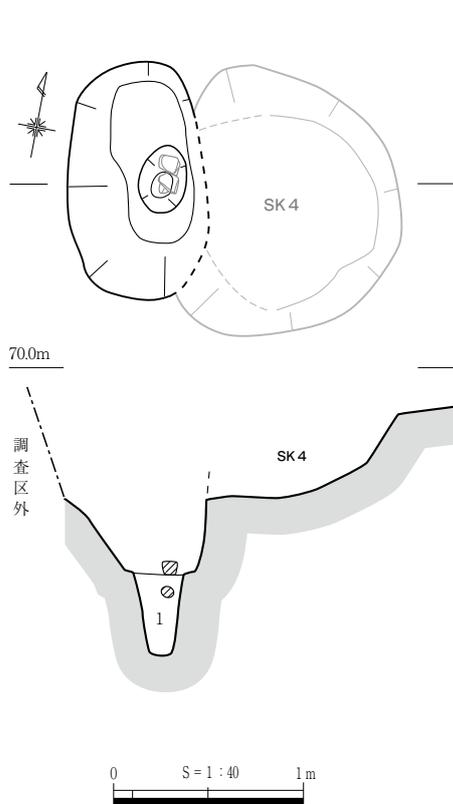
C3グリッド、調査区境付近の標高69.3mに位置し、Ⅱ層下のⅢ層から掘り込まれる遺構である。SK 4と掘方が重複するが、先に検出したSK 4埋土掘削の際に併せて底面まで掘り下げてしまったため、SK 4との先後関係及び埋土の詳細については不明である。

平面形は、長軸1.26m、短軸0.7m程度の不整な楕円形を呈する。遺存する深さは0.39mである。

埋土の詳細は不明だが、色調は黒色、黒褐色を主体とする。

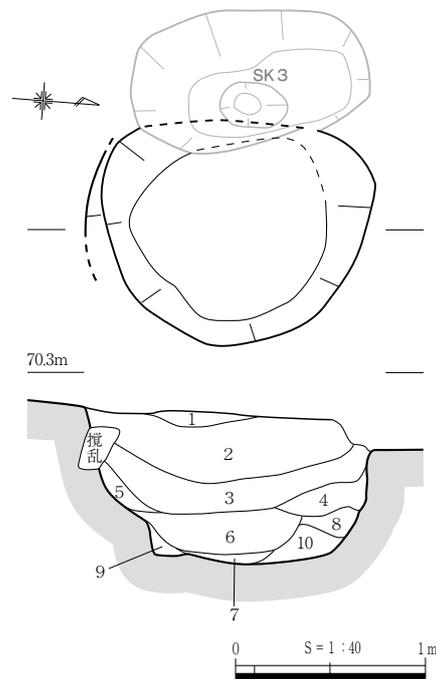
本土坑底面のほぼ中央において、ピット1基を検出した。ピットの平面形は長軸0.36m、短軸0.26mの楕円形で、土坑底面からの深さは0.44mである。埋土は単層で黒褐色を呈し、埋土中及びピット上面付近で小礫を確認した。小礫は基盤層(Ⅶ層)に由来する未風化の火山砂である。

本遺構からの出土遺物は無いが、形態及び規模から縄文時代帰属の落とし穴と考える。底面ピット



1. 黒褐色 (10YR3/1) 粘性やや強。しまりやや弱。
φ 1 cm以下のV層ブロック多混。底面ピット埋土

第52図 SK 3



1. 黒褐色 (10YR3/2) φ 1~2 cmの灰黄褐色土ブロック混。
2. 黒褐色 (10YR3/1) φ 1 cm以下のV層ブロック少混。
3. 黒褐色 (10YR2/2) φ 1 cm以下のV層ブロック少混。
4. 灰黄褐色 (10YR5/2) 粘性やや強。φ 1~2 cmのV層ブロック混。
5. 褐灰色 (10YR4/1) φ 1 cm以下のV層ブロック少混。
6. 黒色 (10YR2/1) φ 1 cm以下のV層ブロック少混。
7. 黒褐色 (10YR3/1) φ 1 cm以下のV層ブロック混。
8. にぶい黄褐色 (10YR5/3) φ 1~5 cmのV層ブロック混。
9. 褐灰色 (10YR4/1) φ 1 cm以下のV層ブロック多混。
10. 褐灰色 (10YR4/1) φ 1 cm以下のⅦ層由来の砂粒多混。
φ 1 cm以下のV層ブロック少混。

第53図 SK 4

で杭痕跡は確認されなかったが、埋土中で検出した小礫は、杭材支持に用いられた可能性がある。

なお、底面ピット埋土中より炭化物が抽出でき、それを試料として放射性炭素年代測定を実施した。その結果、 $4852 \pm 25\text{BP}$ (IAAA-112688) という補正年代値を得た。縄文時代前期後葉に相当する。

SK 4 (第53図、PL.70)

C3グリッド、調査区西際の標高70.1mに位置する。Ⅱ層下のⅢ層から掘り込まれる遺構だが、検出は漸移層のⅣ層にて行った。SK3と掘方が重複するが、SK3で述べたとおり先後関係は明らかではない。

平面形は長軸1.50m、短軸1.2m程度の歪な円形である。検出面からの深さは、0.77mを測る。

埋土は黒褐色を主体とし、自然堆積による埋没が想定できる。

本遺構から遺物は出土しておらず、詳細な時期は不明だが、形態及び規模から縄文時代に帰属する落とし穴の可能性を考える。平面形は円形基調で、楕円形状を呈するSK1・2とは異なり、土坑底面のピットを持たないタイプと想定する。

SK 5 (第54・55図、PL.70・71)

A1・2、B1・2グリッドにまたがり、1号墓北側の尾根部、標高72.0mに位置する。表土(Ⅰ層)及びⅡ層下に露出する基盤層(Ⅳ層～Ⅶ層)において確認した。樹木根による攪乱を随所に受け、遺存状況は不良である。平成22年度確認調査におけるTr.5にかかっていたが、当該箇所は根攪乱が著しく、その際には遺構としていない。

平面形は長軸4.36m、短軸4.08mの不整な円形で、検出面からの深さは0.24mである。

埋土は上層が黒褐色、下層が灰黄褐色を主体とする。遺存する断面形は浅い皿状を呈し、掘方の肩は不明瞭である。平面的な規模、形状から、当初は堅穴住居跡の可能性を視野に入れ調査を進めたが、底面がやや平坦さに欠け、ピットや周壁溝が確認されなかったことから、土坑として扱うこととした。

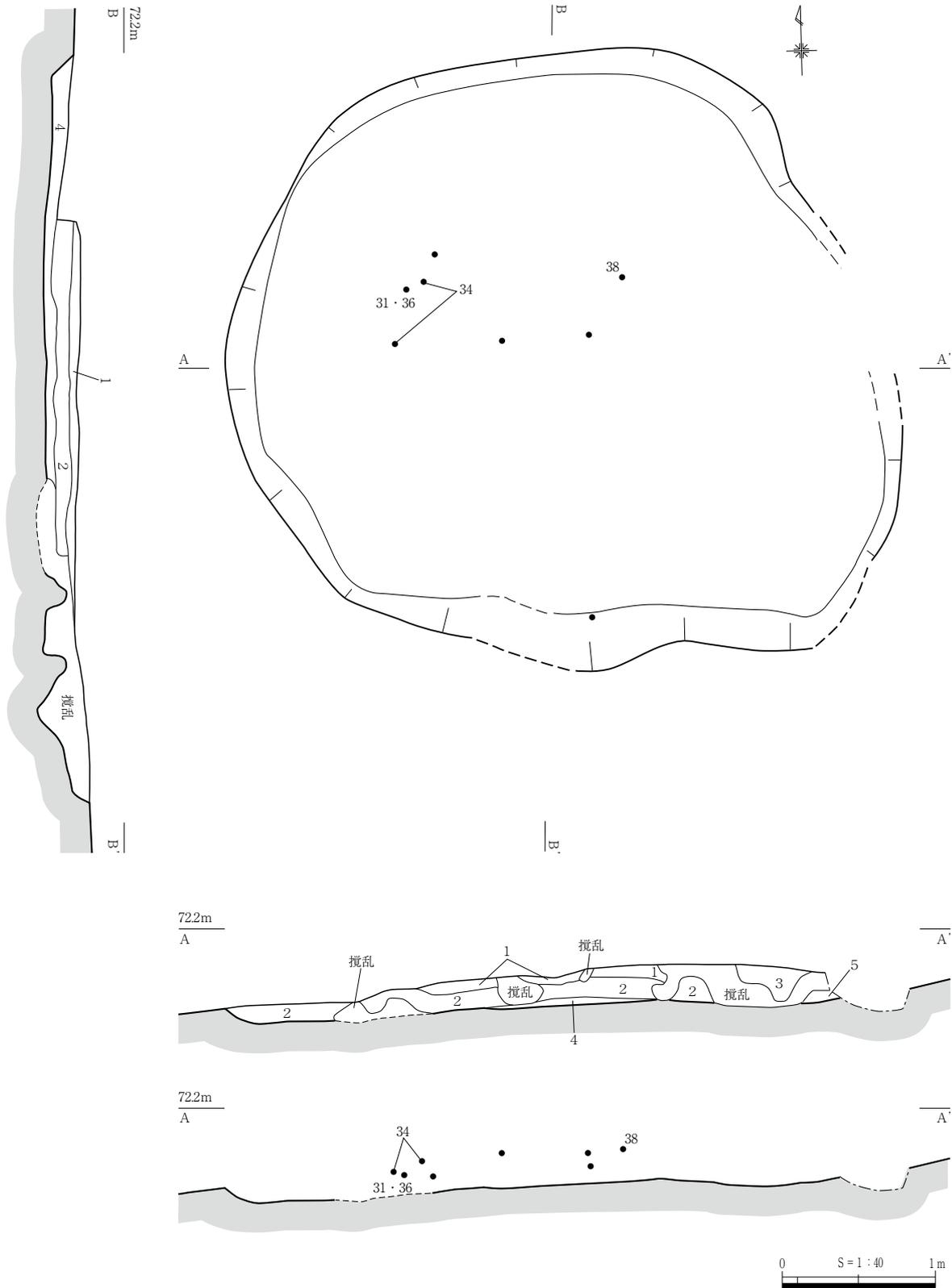
本遺構の埋土中からは、土器が破片資料ながら一定数出土した。近辺のⅠ・Ⅱ層、攪乱土中からも出土し多少の接合関係が認められたが、完形に復元できるものは皆無である。また、埋土中からの出土資料のうち、底面直上で検出されたものはなく、いずれも底面からやや浮いた状況であった。

第55図31～38は弥生土器である。31・32は甕で、いずれも口縁帯に多条の平行線文を施す。31の口縁部はやや外傾し、下端部の突出はほとんどない。32の口縁部は概ね直立し、下端部は下方へ突出する。33は口縁部資料で、壺又は甕である。口縁帯には多条の平行線文が入り、口縁下端部の突出はない。34・35は小型の壺で、胎土、調整、法量から同一個体と考えられる。34は口縁部、35は底部資料である。僅かに外傾する複合口縁を呈し、口縁下端部は下方に短く突出する。口縁帯には平行線文はみられず、磨耗で不明瞭だがミガキが施される。底部は平底と考えられ、細かい単位のミガキが確認できる。36・37は壺又は甕の底部資料。いずれも平底に分類できる。38は鼓形器台で、受け部・脚部文様は多条の平行線文である。受け部・脚部間は7.4cm、筒部径は4.7cmを測る。

上記出土土器は弥生時代後期後葉に位置付けられ、本遺構の帰属時期を示すものと考えられる。

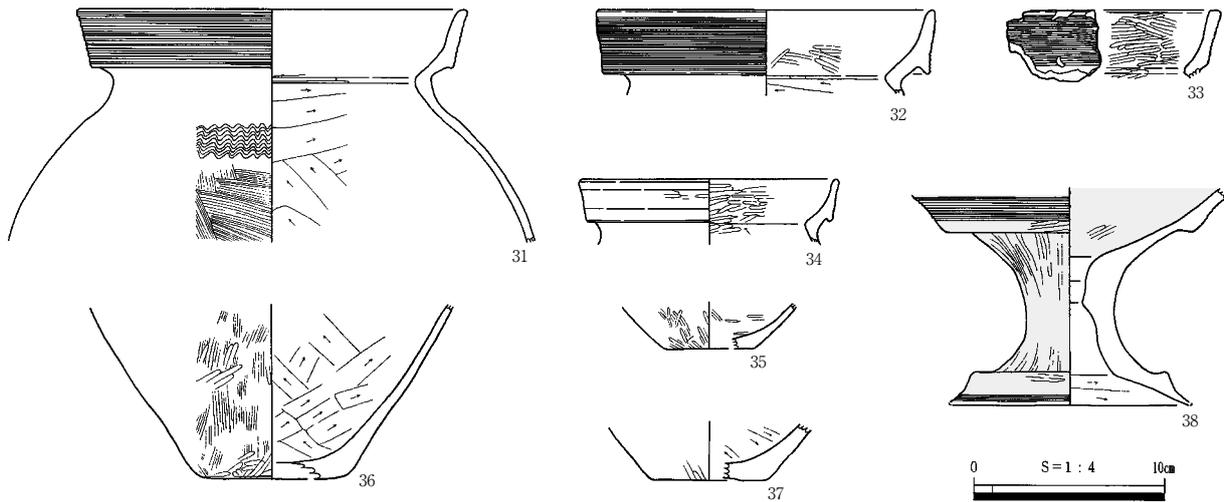
SK 6 (第56図、PL.72、写真55)

A1・A2グリッド、尾根部の標高71.8mに位置する。表土(Ⅰ層)、Ⅱ層下の基盤層(Ⅳ～Ⅶ層)に

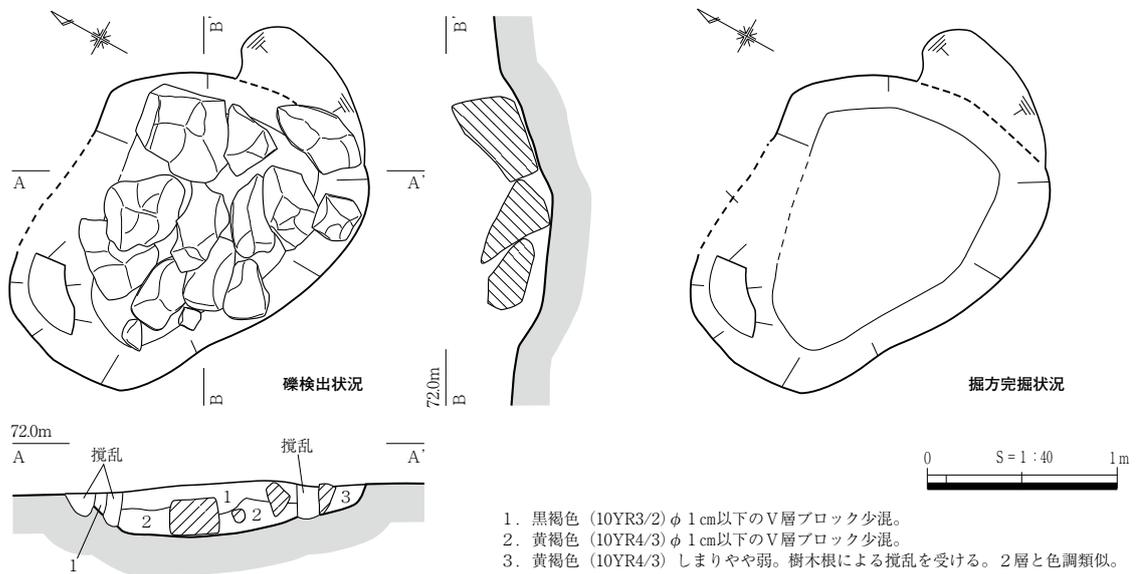


1. 黒褐色 (10YR3/2) 粘性やや弱。しまりやや弱。φ 1～5 cmのⅦ層由来の未風化の火山砂少混。φ 1 cm以下のⅤ層ブロック少混。
2. 灰黄褐色 (10YR4/2) 粘性やや弱。しまりやや弱。φ 1～5 cmのⅦ層由来の未風化の火山砂少混。φ 1 cm以下のⅤ層ブロック少混。
3. 黒褐色 (10YR3/2) 粘性弱。粘性弱。φ 1～5 cmのⅦ層由来の未風化の火山砂少混。φ 1 cm以下のⅤ層ブロック少混。樹木根による攪乱を受ける。
4. におい黄褐色 (10YR4/3) 粘性やや弱。しまりやや弱。φ 1～5 cmのⅦ層由来の未風化の火山砂少混。φ 1 cm以下のⅤ層ブロック混。
5. におい黄褐色 (10YR4/3) 粘性やや弱。しまりやや弱。色調は4層に類似。

第54図 SK5



第55図 SK5 出土遺物



第56図 SK6

において検出した。

平面形は歪な楕円形状を呈し、規模は長軸1.83m、短軸1.48mを測る。検出面からの深さは0.27mである。掘方の南東側の一部がSK5と重複するが、攪乱のため両者の先後関係は不明である。

土坑中において礫群が検出された。大きさは個体差があるが、長軸0.4m、短軸0.2m程度が多く、最大で長軸0.57m、短軸0.50m程度となる。いずれも石材は凝灰角礫岩で、風化が進行するが稜が比較的明瞭で平坦な面を有する。これらを概ね弧状に据えた様子が見て取れる(写真55)。人為的にこの石材を集積し本土坑に据えた蓋然性が高いが、その目的は不明である。礫面に被熱の痕跡は無い。

埋土の堆積は上層が黒褐色、下層が黄褐色を呈する。土坑の遺存状況は不良で、掘方の断面形は



写真55 SK6 礫検出状況(北西から)

浅い皿状である。

本土坑から土器等の遺物は出土せず、帰属時期については不明である。

SK7 (第57図、PL.72)

D2・E2グリッド、尾根部から西側の斜面部へと移る変換点付近の標高72.4mに位置する。Ⅱ層下のⅢ層及び漸移層のⅣ層において検出した。

平面形は長方形を呈し、長軸2.32m、短軸0.78m、検出面からの深さは0.25mを測る。

土坑の長軸は概ね東西方向を採る。また、土坑底面東端は平面長方形に一段深く掘り込まれ、土坑底面からの深さは0.10mである。当該箇所は木棺墓にみられる小口穴に近似し、ここから墓壙の可能性が想定される。本遺構の平面形、規模を墳墓における墓壙のそれと比較しても大きな齟齬は見受けられない。配置では、区画溝の外ではあるが4号墓との関連性を窺わせるものである。ただ、埋土堆積からは明瞭な木棺痕跡は確認されず、墓壙であったとしても、4号墓に伴う明確な根拠が現状では弱いため、本項に掲載することとした。

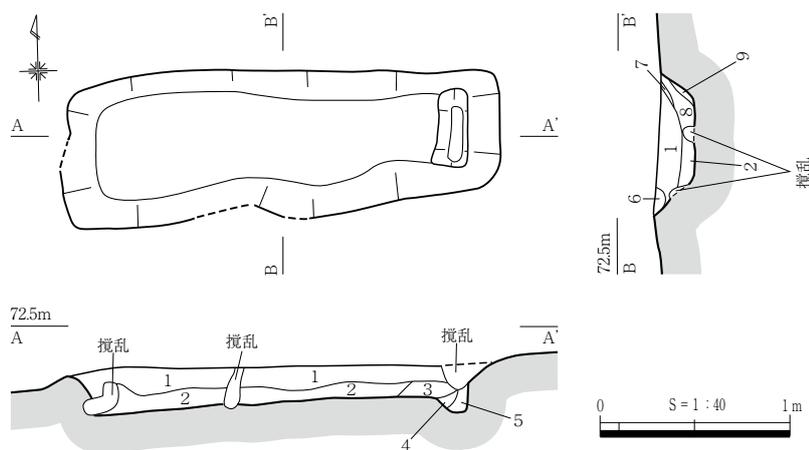
埋土は黒褐色、暗灰黄色を主体とする。土坑の周縁に堆積する6～9層には、焼土がブロック状に混じる。小口穴様の箇所は灰黄褐色系で、しまりが弱い。

本遺構からは遺物が出土しておらず、帰属する時期は不明である。

SK8 (第58図、PL.73)

E2グリッド、尾根上の標高72.3mに位置する。Ⅱ層下において、4号墓区画溝南辺埋土中で検出した。土層堆積から、4号墓区画溝の埋没後に本遺構は営まれたことが判明した。同様に区画溝埋没後に構築されたSK9掘方に一部を掘り込まれている。

平面形は歪な長方形を呈し、長軸は概ね東西方向を示す。検出面における規模については、遺存する長軸が2.02m、短軸が1.18m、深さが0.25mである。掘方の断面形は皿状を呈し、底面は平坦ではな



1. 黒褐色 (10YR3/1) φ 1 cm以下の焼土ブロック少混。φ 1 cm以下のⅦ層由来の砂粒少混。
2. 暗灰黄色 (2.5Y4/2) 粘性やや弱。φ 1 cm以下のⅦ層由来の砂粒少混。
3. 暗灰黄色 (2.5Y3/2) 粘性やや弱。φ 1 cm以下のⅦ層由来の砂粒多混。φ 1 cm以下の焼土ブロック微混。
4. 暗灰黄色 (2.5Y4/2) しまりやや弱。φ 1 cm以下の焼土ブロック微混。φ 1 cm以下のⅦ層由来の砂粒混。φ 1 cm以下のⅤ層ブロック混。
5. 灰黄褐色 (10YR4/2) しまりやや弱。φ 1 cm以下の焼土ブロック少混。φ 1 cm以下のⅦ層由来の砂粒混。φ 1 cm以下のⅤ層ブロック混。
6. 黒褐色 (10YR3/2) φ 1～2 cmの焼土ブロック多混。φ 1 cm以下の炭化物少混。
7. 黒褐色 (10YR3/2) φ 1 cm以下の焼土粒少混。φ 1 cm以下の炭化物少混。
8. 黒褐色 (10YR3/2) φ 1～2 cmの焼土ブロック微混。φ 1 cm以下の炭化物微混。φ 1 cm以下のⅤ層ブロック少混。
9. 灰黄褐色 (10YR4/2) φ 1～2 cmの焼土ブロック微混。

第57図 SK7

くやや傾斜し、長軸の西端、東端では0.15m程度の比高差があり、東端が高い。

埋土色調は灰黄褐色、黒褐色を主体とする。埋土中に礫を一点確認したが、底面から浮いており流入によるものと判断される。

本遺構からの出土遺物はなく、帰属時期については不明である。平面形から墓壇の可能性もあるが、土層堆積の所見からは明確ではない。

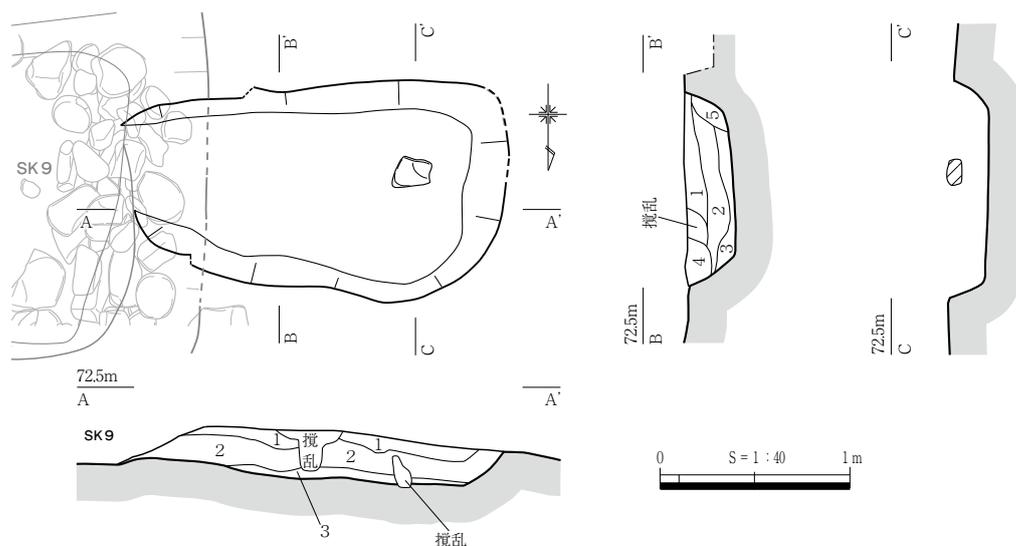
SK 9 (第59図、PL.73・74、写真56)

E1・2グリッドにまたがり、尾根部の標高72.5mに位置する。II層下で検出した遺構で、4号墓区画溝南辺中において検出され、区画溝埋没後の構築が土層堆積から判明した。また、溝内埋葬である埋葬施設4の一部を掘り込んでいる。

平面形は歪な台形状を呈し、土坑壁面に沿って河原石を配している。石材は墳墓の貼石等と同じである。南辺の半分程は調査地外となり、詳細は不明である。検出面における規模は、長軸は2.97m、短軸は現状で2.14m、深さは0.38mを測る。

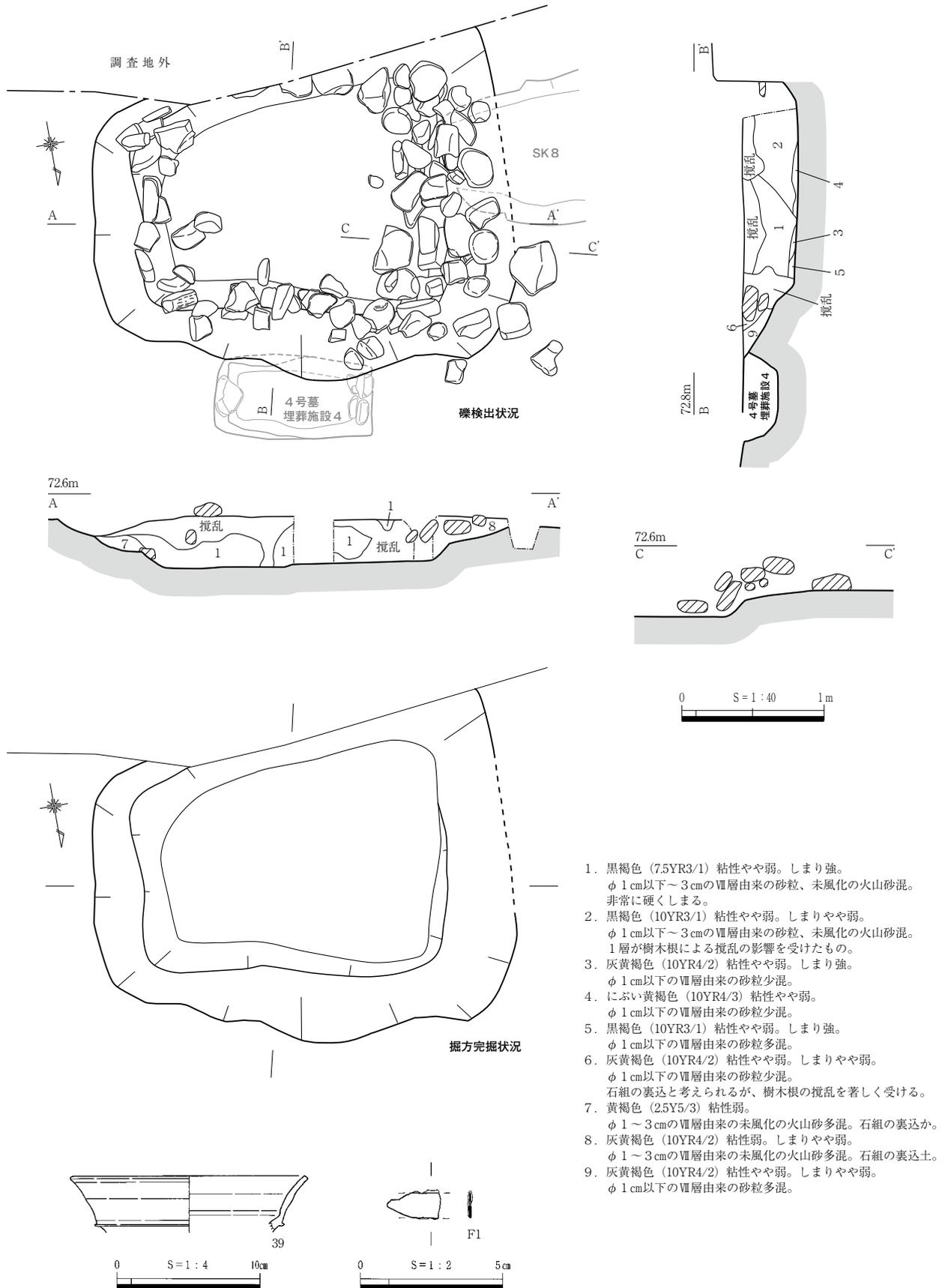
配石は、樹木根の攪乱によって全般にやや移動しており、転落石もかなりみられるが、西壁側において手厚く施される(写真56)。南壁の一部が不明だが、他辺の石積は1～2段程度にとどまる。配石の手法は、粗雑で規則性に欠け、墳墓における貼石とは大きく異なる印象である。壁面の傾斜に沿って立てるものはあるが少数で、多くは平積み様に設置され、構成する礫の大きさもばらつきが目立つ。土坑の掘方は浅い皿状を呈し、一部段掘り状となる。底面は概ね平坦である。

埋土は樹木根の攪乱をかなり受けていたが、その影響を受けていない箇所(1・3・5層)は、非常に硬く締まっており、特徴的である。それが何に起因するのかは、本遺構の性格を推し量る上で重要だが、判然としない。土層堆積の所見からは、棺痕跡などは窺えない。土坑の平面形についてみても、墓壇とは考え難い。構造上の特徴や検出状況から、現状では墳墓より後の時期に帰属すると想定しているが、具体的には不明である。



1. 灰黄褐色 (10YR4/2) しまりやや弱。φ 1～5 cmのⅦ層由来の未風化の火山砂混。φ 1～3 cmのⅤ層ブロック微混。
2. 黒褐色 (7.5YR3/2) φ 1～5 cmのⅦ層由来の未風化の火山砂混。φ 1～3 cmのⅤ層ブロック少混。
3. 灰黄褐色 (10YR4/2) φ 1 cm以下のⅦ層由来の砂粒微混。φ 1～3 cmのⅤ層ブロック混。
4. 灰黄褐色 (10YR4/2) 粘性やや弱。しまりやや弱。φ 1 cm以下のⅦ層由来の砂粒多混。φ 1～3 cmのⅤ層ブロック多混。樹木根による攪乱を受ける。
5. 黒褐色 (10YR3/2) φ 1～5 cmのⅦ層由来の未風化の火山砂少混。φ 1～3 cmのⅤ層ブロック微混。

第58図 SK 8



第59図 SK9及び出土遺物

本遺構には多数の河原石が使われ、これらが墳墓の貼石に由来する可能性は高い。4号墓南辺に遺存する貼石が極度に少ないことは、本遺構に転用された影響が強いと推測する。

出土遺物は僅少である。2層中において土器を1点(第59図39)、層位不明だが鉄器片を1点(F1)確認した。いずれも混入の可能性があり、本遺構に伴うものかははっきりしない。39は土師器で、壺又は甕の口縁部資料である。外反する複合口縁を呈し、口唇部は平坦となる。天神川編年ではI期に該当する。F1は不明鉄製品で、厚みが非常に少ない。形状から鉈の可能性はあるが判然としない。



写真56 SK9西側配石状況(北東から)

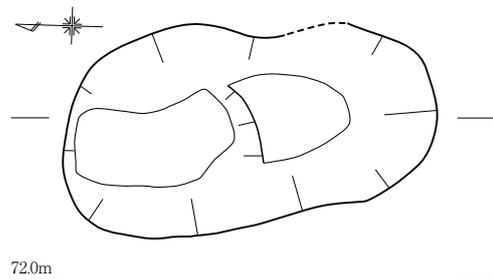
SK10(第60図、PL.75)

B2グリッド、尾根部から斜面部への変換点付近の標高71.7mに位置する。II層下にて検出した遺構である。平成22年度確認調査のTr.2にかかるが、その際には遺構としていなかった。このたび、平面的な検出を経て、遺構と認定し調査を実施した。

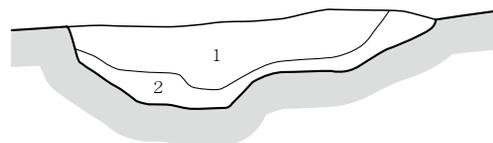
平面形は、トレンチに切られ半分程度の遺存のためはっきりしないが、円形と想定する。径は約1m、深さは0.33mである。

埋土は黒褐色、黒色系が主体で、自然堆積による埋没が想定される。

本遺構からの出土遺物は無く、帰属する時期、遺構の性格共に不明である。



72.0m



0 S=1:40 1m

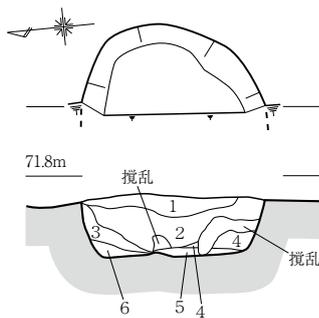
- 1. 黒色(10YR2/1)しまりやや強。φ1cm以下のV層ブロック少混。
- 2. 灰黄褐色(10YR5/2)しまりやや強。φ1cm以下のV層ブロック少混。

第61図 SK11

SK11(第61図、PL.75)

B2グリッド、尾根部に位置する遺構で標高は71.7mである。I・II層下のIII層・IV層で検出した。

平面形は不整な楕円形を呈する。検出面における規模は、長軸1.98m、短軸1.01m、深さは最大で0.46mである。底面は段状を呈し、それぞれは0.2m程の比高差がある。

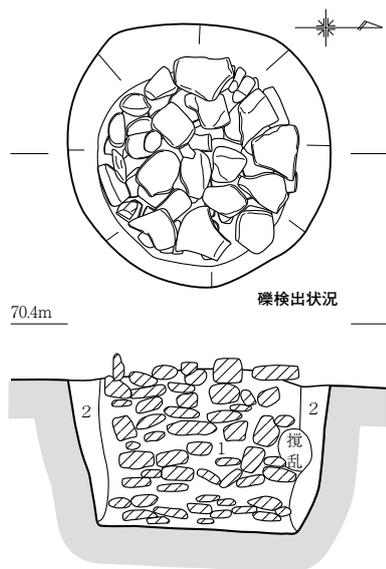


71.8m

- 1. 黒褐色(10YR2/2)しまりやや強。φ1cm以下のVII層由来の砂粒混。φ1~5cmのVII層由来の未風化の火山砂少混。
- 2. 黒色(10YR2/1)φ1cm以下のVII層由来の砂粒混。φ1~5cmのVII層由来の未風化の火山砂少混。
- 3. 黒褐色(10YR2/3)粘性やや強。しまりやや弱。φ1cm以下のVII層由来の砂粒混。
- 4. 黒褐色(10YR2/3)粘性やや強。しまりやや弱。φ1cm以下のVII層由来の砂粒少混。
- 5. 暗褐色(10YR3/3)粘性強。しまりやや弱。φ1cm以下のVII層由来の砂粒混。
- 6. φ1cm以下~3cmのV層ブロック混。
- 7. におい黄褐色(10YR4/3)粘性強。しまりやや弱。V層由来土が主体。φ1cm程度のVII層由来の未風化の火山砂混。

0 S=1:40 1m

第60図 SK10



第62図 SK12

埋土は黒色系が主体となり、自然堆積による埋没と考える。

本遺構からの出土遺物は無く、帰属する時期、遺構の性格共に不明である。

SK12(第62図、PL.75・76)

E3グリッド、斜面部に位置する遺構で、標高は70.1mである。表土(I層)下において確認した。平面形は整った円形で、径は1.39m、深さは0.85mである。

掘方は逆台形にしっかりと掘り込まれる。埋土は壁面に沿い粘性の強い基盤層由来土が確認でき(2層)、裏込めと考えられる。平面・断面の所見から、土坑中に木桶が据えられていたものと推測する。

1層中には、河原石が大量に入っていた。石材は墳墓に用いられたものと同じである。石組のような構築物ではなく、雑然とはしていないが密に詰めた様子が窺え、廃棄に伴うものと想定する。

その他に出土遺物は無いが、形態や構造から新しい時期に帰属する遺構と考えられる。

SK13(第63図、PL.76)

D1グリッド、尾根部の標高72.4mに位置する。II層下のIII層及びIV層において確認した。掘方の一部が4号墓埋葬施設1墓壙と僅かに重複している。

平面形は、長軸0.98m、短軸0.75m程度の楕円形で、検出面からの深さは0.08mと浅い。

埋土の色調は黒色系で、約1cm大の炭化物を多量に含む。また、土坑底面には被熱痕が認められ、本土坑は炭焼きに関連する遺構の可能性はある。

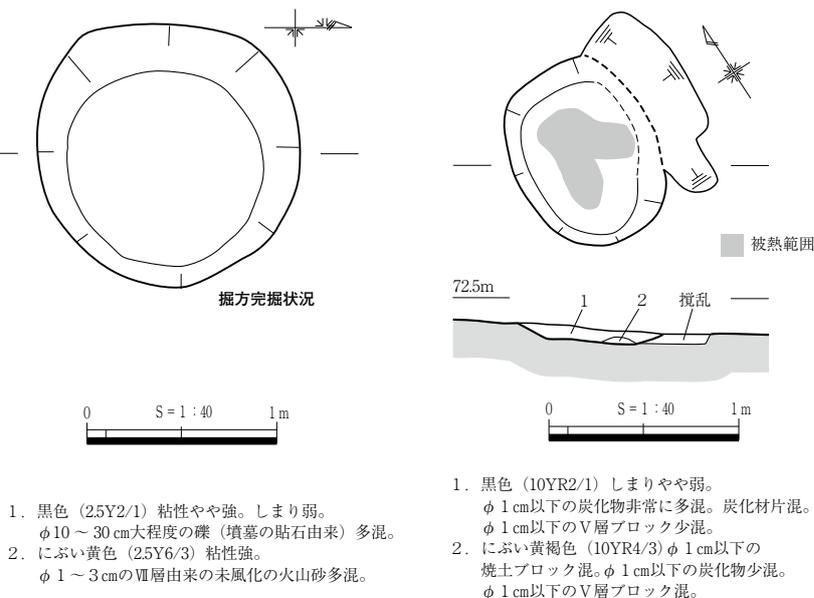
他に出土遺物は無いが、最下層で検出した炭化物を試料として放射性炭素年代測定を実施したところ、補正年代値で233±21yrBP(IAAA-112686)と近世後半に相当する結果を得た。

【註】

(1) 鳥取大学名誉教授 赤木三郎氏に御教示を得た。

【参考文献】

鳥取県埋蔵文化財センター 2012『下市築地ノ峯東通第3遺跡』鳥取県埋蔵文化財センター調査報告書43



第63図 SK13

1. 黒色 (10YR2/1) しまりやや弱。
φ 1cm以下の炭化物非常に多混。炭化材片混。
φ 1cm以下のV層ブロック少混。
2. にぶい黄褐色 (10YR4/3) φ 1cm以下の
焼土ブロック混。φ 1cm以下の炭化物少混。
φ 1cm以下のV層ブロック混。

第3節 遺構外出土遺物

1 概要

遺物は墳墓群に関連する古墳時代前期初頭に帰属するものが多数を占める。SK5とその周辺では弥生時代後期の土器が一定数出土したが、それらを除くと縄文土器がそれに次ぐ。ただ、出土総数は全て破片試料で20点程度に過ぎない。縄文土器に付随して、黒曜石製石器も少数ながら検出した。その他、帰属時期ははっきりしないが礫石器も散見される。また、時期の比較的新しいところでは、底部回転糸切りの土師器小皿や銅製の煙管が出土したが、数量はごく僅かである。

このように遺跡の立地、調査面積の狭さを反映してか遺物相は限定的であるが、以下、遺構に伴わない遺物について、数項目に分けて概観する。

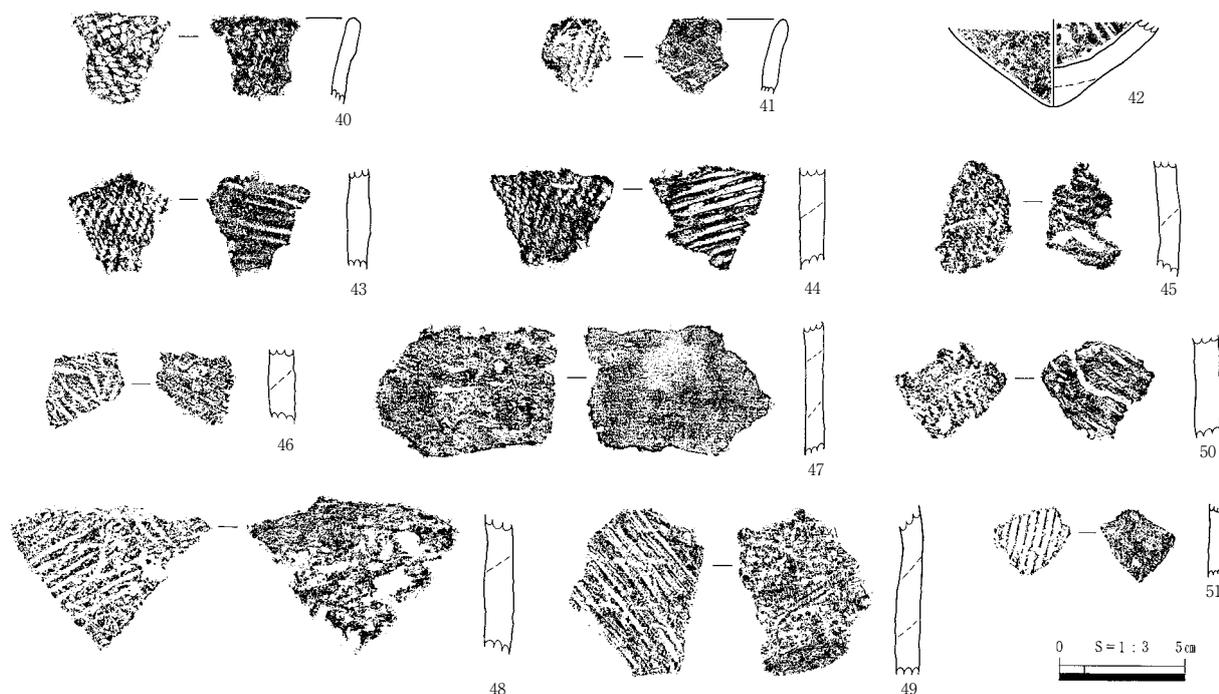
2 縄文土器(第64図、PL.77)

第64図に縄文土器を図示した(40～51)。いずれも深鉢と考えられ、ほとんどが胎土中に繊維を混入及びその痕跡を残すものであり、早期後葉から末葉頃の帰属が想定される資料群である。

40・41は口縁部資料である。40は縄文地で、痕跡は不明瞭だが端部付近に粘土帯を貼り付けやや肥厚させる。粘土帯部分とそれ以外では、原体の施文方向が異なる。口縁部の様相から、早期後葉に比定される菱根式の可能性も考えられる。41は外面のみが縄文地である。

42は底部資料である。尖底を示し胎土には繊維痕が残る。遺存状況は不良だが、これらの特徴から早期帰属と考えられる。

43～51は小片で、胴部資料と考えるものである。43・44は胎土や出土位置も近似し、同一個体の可能性がある。外面は撚りのあまい縄文地で、長山式に該当する可能性がある。45・46も磨耗で不明瞭な箇所があるが、外面に縄文が確認できる。47～50は外面が条痕地の資料である。内面はナデを



第64図 調査地内出土縄文土器

主体に、条痕調整もされる。胎土には繊維を混入しており、長山式に該当する可能性が高い。51は厚さ6mm程度と薄手の小片で、器種ははっきりしない。外面縄文地だが、他と比較して施文が比較的明瞭で、胎土に繊維痕が認められない。小片のため詳細は不明だが、本調査出土縄文土器の中では特徴の異なる資料と考えられる。

2 石器(第65・66図、表2、PL.77)

本調査における石器の総出土点数は、65点と少数であった(表2)。石材別にみると、黒曜石製が60点と大多数を占める。

剥片石器は全て黒曜石製で、他の石材による資料は出土しなかった。器種別では、大きさ1cm未満の碎片が25点を数え、剥片が24点とそれに次ぐ。平成22年度確認調査のTr.2の表土中からは大型の石核が1点出土しており(鳥取県埋蔵文化財センター2012)、それを加えると残滓類の合計は50点となり、全体の83%を占める。石器器種では楔形石器の5点を筆頭に、石鏃、石鏃未製品、スクレイパー、楔形石器削片があるが、いずれも1、2点にとどまる。

表2 石器石材別組成表

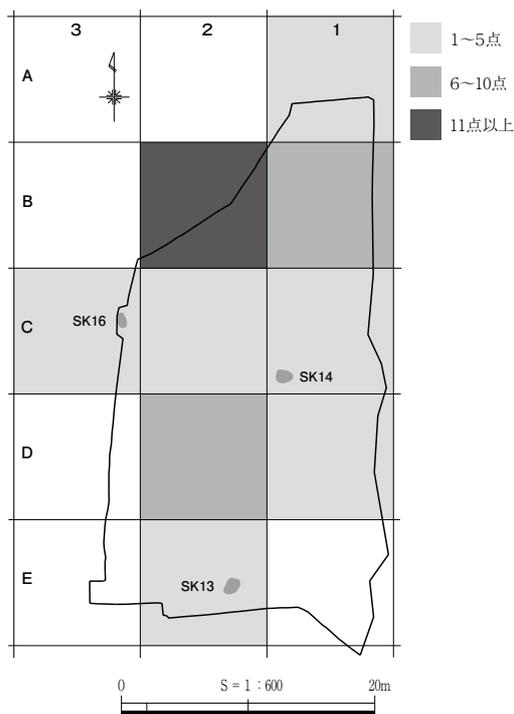
	石鏃	石鏃未製品	スクレイパー	楔形石器	楔形石器削片	石核	剥片	碎片	石錘	磨石	砥石	合計点数
黒曜石	1	1	1	5	2	1	24	25				60
安山岩									1	3		4
デイサイト											1	1
器種別総数	1	1	1	5	2	1	24	25	1	3	1	65

残滓類、未製品がわずかながら認められることから、当地及びその周辺で石器製作が行われていたと考えられるが、作業密度は薄く小規模なものと評価できよう。

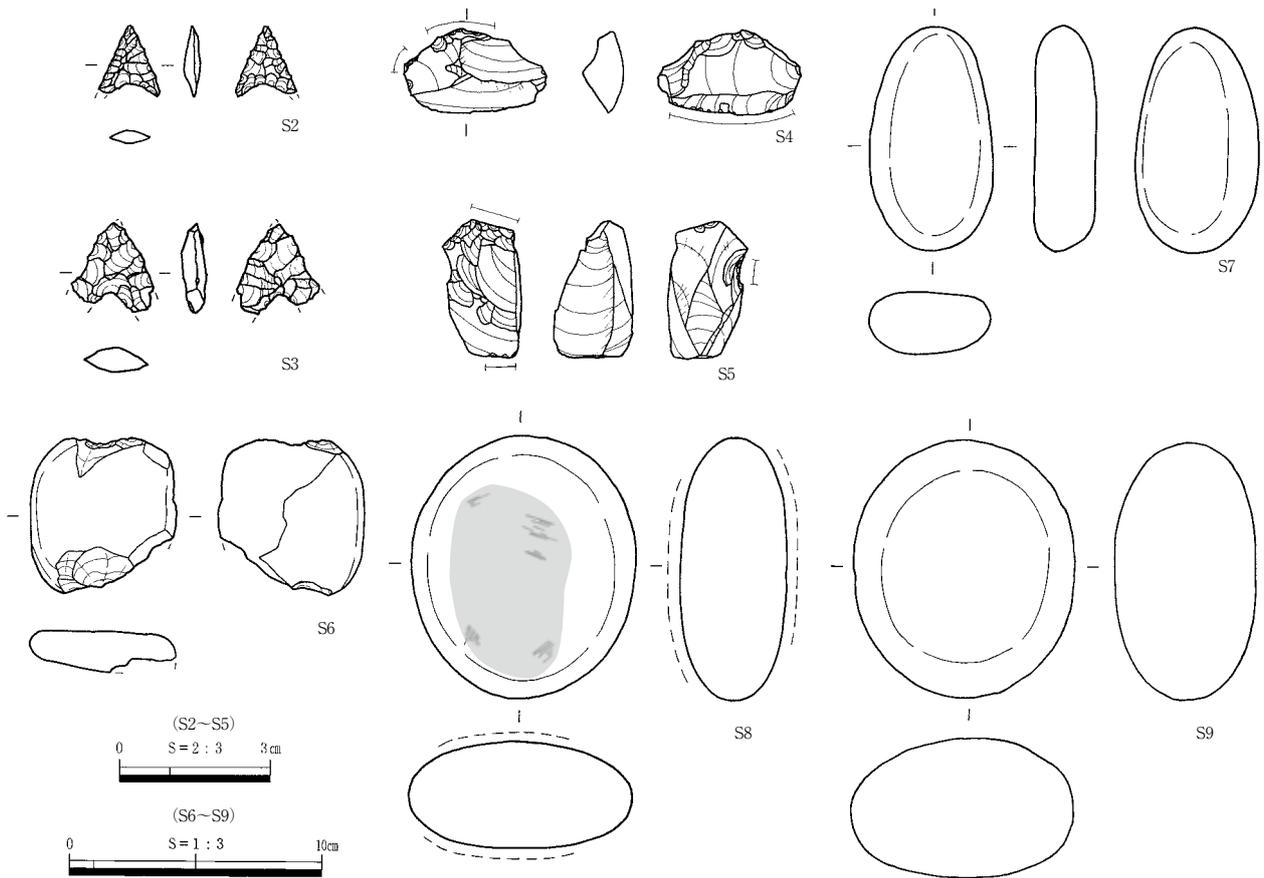
礫石器も非常に少数だが確認された(5点)。甲川河原からの円礫を使用した磨石が3点、石錘が1点で続く。4号墓区画溝出土の砥石(第48図S1)はデイサイト製とみられる。

次に、グリッド毎の出土点数により階層化した図(第65図)で分布状況をみると、調査区北西側のB2グリッドが最多となる。先述した大型石核は本グリッド出土であり、分布状況に沿っている。隣のB1グリッドがそれに次ぐことから、軽度ながら石器製作が本グリッドを中心となされた可能性は指摘できよう。他ではD2グリッドでやや出土数があるが、分布は全般に散漫であり、特に所見は無い。

出土石器のうち、8点を第66図に示した。S2～S5は黒曜石製の剥片石器である。S2は石鏃で、平面形は正三角形に近い。刃部は直線的で、抉りは浅めである。S3は石鏃未製品と考える。基部の縁辺を欠損しており、途中で製作を中断したと判断した。S4・S5は楔形石器である。S4は上面・左側面からの剥離が認められ、上縁、左



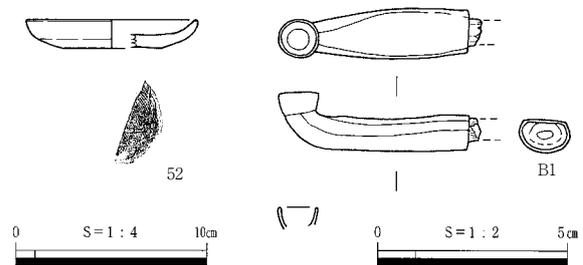
第65図 黒曜石製石器グリッド別出土点数模式図



第66図 調査地内出土石器

側縁が潰れている。下面は折断により欠損する。
S5は上面・左側面からの剥離が認められ、上・下縁、左側縁に潰れが確認できる。

S6～S9は礫石器で、いずれも安山岩製で甲川採取のものであろう。S6は打欠石錘。全面に被熱を受けている。S7・S8は磨石。S9は円礫で、C1グリッドの2号墓南東側、3号墓北東側の攪乱土中にて出土した。明瞭な磨面や敲打痕等の使用痕が特に認められないが、埋葬施設における標石の可能性も考えられることから、図示した。



第67図 その他の遺物

3 その他の遺物(第67図、PL.77)

ここでは、上記以外の出土遺物について触れる。52は土師器の小皿である。器壁はやや厚みがあり、口縁部はやや内湾気味に短く立ち上がる。B1は銅製の煙管雁首である。雁首に差し込まれた木質がわずかに遺存し、使用痕が認められる。

【参考文献】

鳥取県埋蔵文化財センター 2012『下市築地ノ峯東通第3遺跡』鳥取県埋蔵文化財センター調査報告書43

第4節 自然科学分析の成果

石井垣上河原遺跡における放射性炭素年代(AMS測定)

株式会社 加速器分析研究所

1 測定対象試料

石井垣上河原遺跡は、鳥取県西伯郡大山町石井垣に所在し、大山北麓を北流する甲川左岸の狭い丘陵尾根部に位置する。測定対象試料は、SK13埋土最下層出土木炭(No.1 : IAAA-112686)、SK 2底面ピット埋土出土炭化物(No.2 : IAAA-112687)、SK 3底面ピット埋土出土炭化物(No.3 : IAAA-112688)の合計3点である(表3)。

SK13は製炭に関連する可能性が指摘される。SK 2、SK 3は、形態的特徴から縄文時代の落とし穴と考えられている。いずれの土坑も時期を判断できる出土遺物がない、もしくは乏しい状況である。

試料3点のうち、No.2、3は調査現場にて遺構埋土として採取され、後に土を洗って炭化物が取り出された。木炭と見なされるものは、年輪を観察し、試料中の最外年輪側を採取するように努めた。試料の状態と採取に関するデータを表3に、写真を文末の図版に示した。

表3 AMS試料一覧(1)

測定番号	試料名	試料形態	採取位置・量	色調	状態	付着物	残試料	備考
IAAA-112686	No. 1	木炭	木炭 60 × 30 × 30mm以下5個のうち、40 × 40 × 30mm 1個の一部を採取。	黒色	やや湿	表面一部に根	あり	
IAAA-112687	No. 2	炭化物	炭化物(木炭) 8 × 4 × 4mm以下4個のうち、2個を採取。	黒色	やや湿	なし	あり	調査現場で遺構埋土として採取。後に土を洗って炭化物を抽出。
IAAA-112688	No. 3	炭化物	炭化物(木炭) 8 × 6 × 5mm 1個、6 × 4 × 3mm以下15個のうち、後者より5 × 5 × 2mm以下3個を採取。	黒色	8 × 6 × 5mm 1個は乾、6 × 4 × 3mm以下15個はやや湿	表面一部に土	あり	調査現場で遺構埋土として採取。後に土を洗って炭化物を抽出。

2 測定の意義

土器等の出土遺物がない、もしくは乏しい遺構の帰属時期を推定するための参考とする。

3 化学処理工程

- (1)メス・ピンセットを使い、根・土等の付着物を取り除く。
- (2)酸-アルカリ-酸(AAA : Acid Alkali Acid)処理により不純物を化学的に取り除く。その後、超純水で中性になるまで希釈し、乾燥させる。AAA処理における酸処理では、通常 1 mol/ℓ (1 M)の塩酸(HCl)を用いる。アルカリ処理では水酸化ナトリウム(NaOH)水溶液を用い、0.001Mから 1 Mまで徐々に濃度を上げながら処理を行う。アルカリ濃度が 1 Mに達した時には「AAA」、1M未満の場合は「AaA」と表4に記載する。
- (3)試料を燃焼させ、二酸化炭素(CO₂)を発生させる。
- (4)真空ラインで二酸化炭素を精製する。
- (5)精製した二酸化炭素を鉄を触媒として水素で還元し、グラファイト(C)を生成させる。
- (6)グラファイトを内径 1 mmのカソードにハンドプレス機で詰め、それをホイールにはめ込み、測定装置に装着する。